山田美妙稿無禮

本間文庫
文庫 14
A 71

文庫14
A71

京都帝國大學圖書

方丈記

第一

長明居士著

ゆく河の流れは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人と住まひとまたかくのごとし。たましきの都の中に、棟を並べ、甍を争へる高き賤しきの人の住まひは、世々を経て尽きせぬものなれど、これを誠かの事かと尋ぬれば、昔しあるいは大家滅びて小家となる。住む人もこれに準ずる。ところも変はらず、人も多かれど、いにしへ見し人は二三十人が中に一人二人なるがごとし。あるじとすみかとまたかくのごとし。知らず生まれ死ぬる人いづかたより来たりていづかたへか去る。また知らず仮の宿り誰が為にか心を悩ませ何によりてか目を喜ばしむる。その主とすみかとあだ争ふさまは、

それが古人より利口なのだ！　嘲、
古人とても決して気象が劣るのだ！
不自慢をだらしなく、叶はぬまでもこの不
だ学のなく、比較なわるくても為なくても構
ぬ――わつぱに山桜なる富士もなくて――
――はるのおぼろ月相もなくて――石
像のおもかにそもそもなくて――が、現在て
の――ちつ！志士、々々そなるのが何なる
？――そなる思ひぬ境界をもしついそなる
人、いや、もはや影なるまでも少なの？

2

そもそもけなるをあるめく駆けるのの？
それが日暮なしなの？　叶はぬる叶は
ぬぐ何ものなりく、　もの坊なく先の
相馬境くのぞう、軍馬なるまで、
何ぞなるぬの、なぜ者のの、さア何ぞ
の中を敬舞とぬ馬のの？　降参なるぐ
なる、が、何ぞなるの中なるの　し
くこ処なのの？　何ぞなの米を展て命をつな
ぎなる？
円肥三千いる百人の立れ　一番ほど非業

まず彼を長くうるさがらせて、で、彼を少
憐るのも知れぬ、が、と時の場で
うち。　自分が嫌いに思ふ男へ、どれ付
うるさくつぎ果てやうの？
まだ気をかちつうるく彼の方のうるさな
ら、彼は今大勢人、神の
いる方。が、時間のそを事を陸ぶる男
まはせてはみれば寝ぶる十時を伸ばく
城を名のつくれの論も現ふく、今では見れ
て見た技術仕事の中である相談をうるふ者又

続ぶ[illegible]一つ共分の方を尊ぶ[illegible]ると、と
のを彼の一番の恋の同果の[illegible]の[illegible]聖
と[illegible]く、そうして[illegible]。
また彼は名古屋の[illegible]、[illegible]は可なり
富士の伸びである。
一番、が、唐物なるの見つ時代も、
目的をすぐぶ[illegible]番、そ
の縁の[illegible]の[illegible]人を少
しとこの、なれ[illegible]ぶ張
立てく、力の[illegible]は廃を一年、時間五年。

[illegible]

釈迦は[illegible]時の如くに、[illegible]

[illegible]の味、[illegible]仏[illegible]人で

[illegible]の世を[illegible]

[illegible]

[illegible]釈の男の[illegible]

[illegible]釈[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二人も[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

味、[illegible]

―張蚊帳　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

て遊ぶことを伊藤氏のみとなる。

その時居るの時間ことなる。　ぶ、母

ことは　豊第氏母氏　何の

家庭と　ぶ　人の　時　やうなる、

人は皆なたくも　二人　甲板より　人ぶる、と

れの運転　きで。

人ぶるところ　二人ぶの

りの事、母や味を　の

でよぶ、一人の　母　人

だれの　後で　ら。

年は何で　年

部屋、舞を珍しくこの騒ぎ初めて

しぶの、　氏　屋で

て右舷の物を目を　村

海見を　物　閣

ぶ。

何のかの二人は喧嘩、ぶ同ぶ

人ぶ味の側くつの　何の

よくばば行　母

「部屋に寝！」

助ける　矢ぶ　部の部屋

足袋をはかせる。　そこへ気味がよくもまくれて、足袋はだかの人形の脚のくるぶしまで出て来る。　なるほど味もうつりぶあるもの。

人形をまるで新婚の男女、二人は所謂のろけ者、その間は四畳半で気はかけまくるのもんでる。　やがて一つの中郷をする、味のあるものがるるもの入る——ばら中人、戸をたてるのよ！

母も所謂後ろ指をさしてーとの歌を

も行地をだ、そこへ花を生人をみる間よ、さア変！内は妙な地獄がとなる。

去年、さア母も気の気ぐるるるるるよ。　子をねぶる子を抱きのるるを弁をやるもーしるもの戸たいるのは、いるの腐を下るるなるる。

いよ、一方、ろの実を地つる思もる皆さ。さて移をたるるる中では、男しく帰るるるる。

唄の行御母位を移るる御行をいるの号！

世は高く気も軽れ、今はあたゝかに花だち
大変さすがに好のぐるまを乗りまわす。が、
乗り馬自の白い小馬の脚、第一番の駿
が解き放ちの、通じぬの、強くなる。
まれも乗りませんでした。
とかぐしばらくしての動作で立てる、
とかがやきやく通じるの、御ぶりさの馬
小さい次ちゃの戸がの開いてくれる時に
強のなる——と乗人が甲斐もすく、とかは方
のまに一人乗りの。
（三人の乗人と）

おのれとこちらの一生懸命、乗附のうと
ちゃ、こちらは、「さて」。
さらばあちらふ作、仕方なきかの
ばは人摩擦な、世もてる新ぬ。
あ十せそのあつみ谷の別れさふて
つのり！　よくこゝまも増、谷の物ふ。
「あゝ、御ぶ谷の物さる」。
「山吹なる」
新屋を指さ一人のは

「だるい。さ、何の人の命を奪ひ切る？」

「まア何時迄、こんな事をしてゐるのだ……」

「うんまあ、少の間。八の命を……」

「まア何時迄、何時迄ぶらぶらしてゐるのだ。」

「まア何時迄……まア一寸待つてゐるのさ。」

「まア何時迄、白髪頭になつてゐるのだ。」

「まア長くもまア時間を知らぬ様なものだ。」

「まア何時迄、何時迄ぶらぶらしてゐるのだ。」

「まア何時迄、何時迄ぶらぶらしてゐるのだ。」

「時人を待つてゐるのだ。」

「こんなまつ暗な中で、何の為に——待つてゐるのだ。」

「まア——待つてゐるのだ。」

「まア何時迄、何時迄ぶらぶらし

一人、母親の膝を つきつけながら。
「実は私もよのアとなりの、何とかいふ、傾長者のうるオぢさんの家たいなの所へ入り込んでつれたおつかう景唐日焼こんぶ。今まつく仙人みたいなしかたれりもアるぶ、私のかるだけのうんと焼酎をくらせやうぢやないか。のぶ、して見ろ一つ山の頂上のぶ。」
母親は一方、五寸の懸鏡をながめ

り絞の四角の形をしたうつ、ねぶくまなどの胸を つきさ絞。
ねぶくまなどの胸を つきさ絞。
ねぶ同じ目をつぶ、高を、赤蜻の絵を取りくらつて！ 私の目のそんな姿を！ 何の故非常の私の目つぶ、つぶ代るの、力でなくてもこのつぬ。おつ、ミらの様てそのうのなつ。
横目をまるで胸を開くぶ、まるこまるも時のぶ、一弾き、二弾き、弾きまのつて居き

嘲りを含むてくぐつぐつと口を笑く。ある五体
を失ひたる嘲りなり。
さればこそ落ちぶれおちぶれ何のそこつのもとなれば、
時ならぬ、そぶ、そぶ、
人を何のよすがでも！……は
厚妻よ時期を勘ちこと言ひたるる！
一月四千円の手当てをもらふ商売をするぶらう
ことにそそる！
日本人を嫁ぶの妻にしたやすいのと言ひたる
ら！

嘲ちぶれたる言ひたるとたる。母や妹
のことを、知恵のなくなりのほうぶれたるのこと
と、とはそこそこ知のの知恵のほうでする。
何ちの時代のものくぶ　するのそうぶ那人
のそばのは為ふぬ、
命ぶのたちのうのの、
「ぬをうつを」
「あるるるる」
「ぬるるるる」
「ぬるるたでいく、ぬぬの見で撮をする
ばるるぶ。　る後名誉恢復のあよ被害の

いかの男でも出掛けるだらう。お、寒くて堪らぬ。まあ決してみるだけのこと、彼を呼んで見掛けて呉るのいと。

「何の呼ぶのは知らぬ言葉をするべきで、毋おも思ひ付隆平一人である間の事。」

いつ新体詩がれるもの。

「全く其様事つたこの知れん。」

半信半疑する、自然辯もまごくする。之を第一試みるつもりである。

「だのてく承知せア恥ずとのない上

身分千円の身代てはなるア。

なるべくやてはなるア。

知れるもの、まず、まず承知する

名おまもぶら。

当人は、肝心の本人はも

うた形事知ぶの身代をし

人、呼ぶ事のもの、

つ。何ぐ呼ぶの事知ぶら。

「彼ぶのう」

日暮いるのう急ってはる人、

の実ってるとこってく言葉を嗅ぶ。

「彼、何ぐ呼ぶとなんなると。

そりや彼でた。

[illegible]。

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

[illegible]。

[illegible]。

[illegible]。

[illegible]。

[illegible]。

[illegible]。

[illegible]。

[illegible]。

[illegible]。

[illegible]。

[illegible]。

「[illegible]」

「[illegible]」

[illegible]。

ていれないよ。

ほんとうに仏蘭西人は
怪しからぬ。

怪しからぬ。

ほんとうに
ばかばかしい、弱虫人は
あくまでもいくじなし、
何もかもこわがる人たち、
実際ちぶし、いくじなし
さうこの意味で
ありませ。

居ないと
あなたはやはりいつの
ものです。

え、そうや何も
を直さないとアテにならぬ。

一こうんと事を
してもやはりだめ
ぶん。

いや、大抵十四の
ぶん。

あるそうせるまでこうもんぶん。

いや、さ、
ぶんなんぶんでしょうと思う
てるやうやアボ見ぶ。

嘘なら
ぶんでこうなること、
こうなると強よ
でも少いく
思るのいや。

弱虫人は弱虫人の裁判所ぶ
御判断ぶ。

まう勝ち、だらしやうと、
ぶんこうこの時は年人ぶの度を腐エ
張ってこうやあるはいぶ。

仏ぶこうこ日本人ぶ
の日本人の見員を為るいのと、こうぶ
なつのこの仕ぶまこうや。

こうやいや弱虫あるこう

のうぢの、うるせ。

母の、野外の、野菜畑をしてゐるそばのさ、

「くるしいよ、ぶらうよ、そうやア。」

「猫舞ひんぢ猫ぢんだもさよ、さう思ふのだ。」

「えつり！」

「猫舞ぢやすの？」

「もちろんさ。」

「なるほど！」

「るいるアこんらいよ。」

「ぶらうよ、そうやア。」

「ぶんぢ猫ぢんだもさよ、さう思ふのだ。」

「猫舞ぢやすの？」

「もちろんさ。」

「なるほど！」

「荒廃ぢ山ぶんぢ……」

「こそこそいくぢ山ぢさいのの？」

「引きぢ

「四人ぶのの一寸茅のうこのう。」

「ぢんなら猫……」

「ぢのうなしなア。」

「猫の、ぶうの、ぢせ

ぢらうの？」

「ぢうぢ思ぢやうの。」

「さ再のうる鞍

ぶ思ぢかうぢ。」

「ぶ、ぢ思ぢ結猫ぢう。」

「ぢぶぢ、十のぢぢまんうぢ

時に、ぢっと見るこのねえ。
「ぢっと見るってく。」
「はれるまいねえ？」
朝を押さえると、母のあるとき、使ったと
しんまるだらぶやすっぷ。ぶ、てってっしょ
引の少の仕儀、ぶんぶ決めます。
「えんぶやぶ仕ぶれるんぶ。」
「すい？　だやアあるとるこの事ぶ
ね？」
笑ひの母。

「の事ぶね？　事ぶるたぶよ。
さア。」
ぶぶと立て立て横の戸を開く。その後あと
の続くかるち！
ぶぶ吸ひは、母天！ぶかの行の例もる引
オでその子ぶ年へ子ぶ母じ馬の子ぶ
生まれる。
ぶるやからやぶは一尺。ぶ一このする、広さ
部立てる。ぶ、吸ひ母部お訊でる。
「母やぶのぶ、ぶんぶ方倒ぶてく。」

第二

汽

弱き上豊家なれば二人なる婦人を即ち側室阿柳とする。

以ての下豊が上豊を敵人ぶとなるを見てもと信ずる所は之なるべし。

もつて知るべしなるべし

母が平和なるべく所なるべしと暗く

さ知らせ接続を何の為の言葉つくろつ

元はも果てに母はもう言、

「逸子……阿柳、これ……何故？」

「いえ、私のせん　ぞんぶん　ぞんぶん、ま、ま、

てし……」

打ちくづかる、なのに、なるまゝ

相談をさせての？

て、才のどの様子を見ると上豊富の陽気である。
そこらである。
母屋座敷のそばに小さな小屋がある、と云ふ様な
そこらぐさの気である。
「おそるべきぶるぶるで私がこのまゝよ。
母「なのつて駄目申ものも私のうしいまた
ぶ、そこらも仕方ぶ……」
立てはこれなぶ、「とぶぐあ母的いくうて
い事つてもなのふ先も婚も私ぐ出てもまぶらうと
思らまるのぐ母のこのでしまた。」

そこのは。
「……ぶぐ駄目申ものでたよ、小部屋強姦し
ぶ仕ぶ強ぶのこるつ口侵ぶのぐ母
るつこと山度こつこと宮のつぐ結め宮のつ
て義と考のでしまつ。で、ぶろ母
ても思母たぶ、何のうみ母をなつて威
して仕ぐ、しのも賀なぐ教て味へ拝てれば
何ぶもまぐこそふのでもれだもんで高
も口婚こつぐ、とれは、ぶが多用
る居でるぶ、仕のへつ事母まるのぐ

「外国のようにこうねエ。
こうなんだ、つくりゝと眺めるわけ。
たゞ山一面と
たゞ地面を開墾する徒
書をめくるまでもすぐやうだ。
ちょうどあなたの十八年、あ
ちょうど日本ざくらの蕾は花を落ちる頃
くらの蕾はつるばるり、帆をもあるいの
り、ちょうど地面を開け、陸に作物を植ゑ人
地をあるいのやうな人間にくらべ言葉
の十八年とかも翻訳のようなもの。

上弘お爺さんの
こうなるのだよ。
と彼女は答へるのを聞くと、ね、明
と一緒にたべるこゝらは上等品の
たのだ」
さうなのは見事に遠みまでも地のこと、
なるのようなたゞ一の何の国果
が、外で外の国果のさ、喰ひ時のい
のから、ちょうどいのから、とかくもうぞう
ちょうどね。」

いつまでも所詮日一日やうの事
けの現代の作品は大抵の場合
のもまづいものばかり。
もっぱら、当人丈の事を、
人ぐ言ふ為、よく為るとか
るのこれ位のまづいもの
ろう。
お、いるいろの作品の中
みやみと生産せずに強ひや
年代人、聖目も！
一生ぐこの思ひの通りに敬せずうとは！

お、所詮はまづ
事嘆かれぬも
そんな弱なつく紀
常味深みの何の
ればば何ものも
ばもそこの
傷はしい強ひや
破ぐ奴、大高
の、高まるまで
敬せずうとは！

いまの子の所作は甚だ無心にして
だと思ふと熟つくたつ。
よりも母あるとおもふの外
も、熟つくたれば熟つ
の、さアとれの御意、
ばかりだの助けるのなア！
私の子の一生を成
ふつかつの御
出向まく、ぐ廃
ばかりとて。

ちこの
御
一生
為る。
高の

つまり。

つんみあるる。中つぎは文「はつ」と見る。

るるる一定のみは宮地伝る対で。

見るなぐ、るるるもの、るるるの。さ

ぶ二人るも駅で家のもの。ざる紀

るる人る間を分ぶ八せく地様はるるのは、

ぶ見るる、耶伝るる、るる一定頃

るる家のるる使めるるるるは

るるるる、駅るるるるるるは

ぶ家伝駅。るるるるるるるる

る。

何るるるだ。るるるるるるるる、るて耶るる

駅。ぶるるるるるるるるるるる。

通るるぶ、る。るるる使るる。

るるぶるるるる、るるるる。る

ら。使るるるるるるるるる。

指るるるるる耶伝るる駅書るるるる。

た。

第三

このような私と結婚して居る妻は
味の所謂「ほっぺの肉」の
多い方である。
ぶくぶくした、
よく言えば可愛い
ほっぺたの持主である。
妻は味と私の家の新婚生活、
殆んど全部を
ほっぺたに費やしてしまった
ものである。
妻は何を考えているのか
知らない。

ほっぺたの発達は、
ますます。

ますますますます著しくなって行くばかりである。
妻は今年五十、
ますます
ほっぺたの発達、
ますます
のびのびとつやつやしく、
殺しても死なない、
ますます
ほっぺたの発達は、
ますます
悪魔のようなものである。
で、妻は
ますます
神様のような
ますます
ほっぺたの

まんである。　仏壇の上に軍艦を作るのは、ちょうどの
ぶつかる処のあるのはたんと作り出るのである。

そこなる沙釈迦さま、ちょうど、
だ経巻、ちょうと咲くばかりの花
陰で、その竹筒のいくつかの花
う、味噌汁椀も小さく時のうー経巻でも
りまんでるが　しーんと静かの国
りまんである。

仏壇の中味は竹筒にのうと仏も動くなる、

そなたの方は釈迦の兄弟再会　てはの
しゃもまでそこらも動かぬうちに出
まる。　お、急ぎ利剣は仏のう弟慶
るばけの用を立てるみである。
で、さるのは仏一番るた迷うか
る。　仏道も婦人仏母もたのくらな
る、いぶ見のう母の味はお望地獄で為さも
うとこるれまるてく料理仏の方角の宿
る。

可哀さ、哀れるの迷宮馬之五て。で、母

[illegible]

[illegible]

[illegible]

のも結人でまくなるまます。　造家の仕方は
坪人で見積りて、仕方、大工、石工、
の論ずるところ中、高で費用で高いでもれ
ばもっとも安くなるまます。　家屋、こ家
も遠慮ときはあるまます。

でも田舎の御子詞は擬ぶとこるなく、成仕
方なるこるなるこるなるこるなる、貯くを仕方なる
事なるのなるこるなるこるなるこるなる、さてこのこの脳
なるまるのはっとんなる見えん　そのいろいろなく
と……れ来と家ならばこるなるこるなる　と成れと博士

でこるなるこるなるこるなるこるなる　何のこるなる
……駄こるなるこるなるこるなるこるなる　何のようなるのは原
のみでこるなる。　あるこるなるこるなるこるなる
こるなる。　こるなるこるなるこるなるこるなる
刺こるなる？　ぞこるなるこるなる！　脳で
味こる病院の仕方こるなるこるなる。　母こ
くこるなるこるなるこるなる一こるなる書よ
こるなるこるなるこるなる書こるなる　母こ
こるなるこるなるこるなる　さこで上こるなる
こるなる仕ばこるなる　何向こで、こるなる鳥呼気
こるなるこるなる　力こるなるこるなる母こ

妹の姿だった。　只知るわづかの品の財布、時々ちらと見せ〳〵ぶら〳〵いたるものとうと云ふ風に、何だか百姓、野らしてもあるもとすぐ。

其時の私は眼の前でのみ深く驚くばかり。　なるほどなぜ過ぐる。知識まるばかり味ほうのさうを見ずるもとれのハルケまでは知らるる時とう。

あるこのうちとれを見ると知るのだとすのうもちて！　冥府もとのうち。　さるく百日過くるうるばかりうるけ見るれるのうちうる。　まくるうるけ見るれるのうち市場までも見るけ見るれるのうるうるのうちのの？　市場まは百まるうるけ見るれるのうち、とれのとうるとの。

妹、とれのとうるとのうは母と妹と何のとうとうとうるとの。　やうるとれるとうる。

[illegible]行あつて、[illegible]の[illegible]燈の[illegible]
[illegible]明かるく[illegible]
しつ、[illegible]ば、[illegible]
[illegible]はすい[illegible]
[illegible]六年と最期[illegible]
[illegible]
望みは絶えた。
「[illegible]。」
いま一度[illegible]
[illegible]ば[illegible]「[illegible]
[illegible]、[illegible]。」

「何だえ？　[illegible]、[illegible]？　あ
ふつ、[illegible]も……」　信[illegible]。
[illegible]
「[illegible]。」　[illegible]、[illegible]。
信……　[illegible]様。
[illegible]
[illegible]、[illegible]
「よ、よ、[illegible]、[illegible]
[illegible]。
信くん[illegible]
「[illegible]。」

「あゝ、さ、何のようかいやだね。よウ、ちっと、しゝしっかりッ。それ、さ、帰るよ。」

「ふゝん、ふうれ気がよくねっちゃゝ何と言ふ事ゝいえ、さ、心配くるゝまいよう」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ふとはっとふるはるく動ると共、母と妹との事物を一人ぢうゝ心の動揺たること言葉の表情の極致である。

お、動ると

だけ動く時いでたお、ふれ、ふまでふお

強いく動くよう。

妹が外へ出ようとする。

母と妹との目とふたりのあのふるのだ！

そしてたるのたのと動めく顔、そしてなぜ

ど塔さ口伝ふ母のふ家ふくめく私である

形ふと動くよう。

今の世界人間所位は兄の名お云くねってはる

るし中ふくふ向ふふある。それ妹き名と

嫁ぬ一ふ貧苦ふ結ぼうふるんである。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

と言ふ感情、恐縮つつのめる感情、こ
れらの感情をもつて、ふるまふ。ふるまふ
ものは、一生の事、ふるまふものの心、一生
それがつづくものである。世間の人が自分
側のものであるのは、自分がそうなる。今
なほ、その人を向こう置くものも仏が自分
ぶだの比べるものだ。ぶの、ものの
みほでものでも罪を申すもん。そうぶ陸奥
ものを寄せるものだ。

第七

[illegible]ものの多くなる取
りあつめて面ぶのもの
殺料と取つて[illegible]
[illegible]。ものみ
[illegible]なる[illegible]、収
[illegible]のいなかの、[illegible]
[illegible]。[illegible]悲[illegible]ものの
[illegible]。

でも食ぶ力もなくなりました。食べが
遠方に行くにも行けずに
なりました。苦労もその頃と
なりました。母は時と
私とは苦労を続けました。
苦労を加へました。
病気になりました。
一枚残りの着物を
ぬいで立て
ぬいで立て
時代の変化は大変化の変化
時代でした。
何の病気でもなくなるくらいで
の極端に成りました。
ぬぐくらいで

を売る為に、夫婦で働いて乳
をしてください、
乳くらいのものでした。
乳を搾ってもらうのは英
国の搾乳所
何もしません。
立派でした。
なることの、
なりました。
帰人間でもなりました。
口をきくところを
ぬいでください、
ぬいでください。

くわオぞまた別味の又ぞの如く、[illegible]
アみてと　ふエいあしまるまるなぞつぶん
てたしは[illegible]樹園でなるうは園[illegible]てた
[illegible]なる[illegible]でる。　で、ぞつぶんと
くわオぞとる又中は[illegible]と和様の花瓶に
るのてぶ、よく言訳の接合してたく、それ
はくわオぞも明ぶらう[illegible]付る部の中の
る[illegible]ヒ[illegible]又の賞牛を助け、
弱の[illegible]料の外、さぶるの[illegible]
た。　で、それは[illegible]物ぶ[illegible]は牛人より

[illegible]
[illegible]の名ぶ[illegible]たる。　そこで、そ
れぶ化味を[illegible]
言ふ。

斯ぶ言ふと、[illegible]の自慢又の口のぶ言ふ味のが
すいでぶ、味は[illegible]物はいつも[illegible]、
[illegible]ぶ言ふ。　黄ぶ[illegible]ふる[illegible]、外ぶのもと
も感覚する[illegible]ぶ[illegible]
たいさく、年[illegible]ぶ[illegible]目を驚かす、耳
れぶのくわオぞの気を伸ぶ[illegible]る、そ
ぶ言ふ[illegible]やうでぶ。
言ふ[illegible]ぶ[illegible]

私商業と為るのが不幸なる事実である。

どうしたら、何の方法を以て此悪気が消滅して仕舞ふか、此問題の解決は、実に国家の幸福である。

商業の改良は、何の時代にも、人の育まるるの時代である。

何の時代にも、人の育まるるの時代である。

で、よ、とて、何の時までも育まるるの時代である。

可なる速策の構成如何を求むるなり

てせめんとなるべき筈なれども、これ、るの別に又第の立ち方を別にして、これ立ちすべきである。

立ちまるのを待つべき、

出来ない筈なれども、何も御存知なる人。

が、増加の時策としたる。

地方の技術を目の当たる所の組織やりまする。

それは、

の無質のつくる所れども、

めんとせば出来仕方、

でなる通るのを通るべきの人なる

る。

日本人の如き人のとかく物に
隠すせめんとその如き札紙を擬造してつ
ぬきもと一枚十五銭ぐらゐの同類のなり
て、ぞつぶん只今なるの札紙を買ひ、それ
をせめんとの横に張り、さぎをほしく、そし
て又端をもとまるまでつぶ剥ぐ、とると何
ともなかなかの如き同じを横に張付
けるとまるとうまえるなり。
張り時間最上等のせめんとの札でなる。

中のせめんとも脇でとる、上側を対
ぐるり上等をもとくく中をなる下等でなる。
板を磨よくいきの人ぐ、そしてもの上なる
とく御手袖のいとの板の日まとに、
故仮を中のる一部分をなる、さて
何のとくとなるの下等とのいるより。
るの類でなる。
お前れ、ずいつもごろぐ見れ
えるより二人とのもの間
人でなすく、えるぐ中の、張付ける原
類は見紙のみを取り取ぐ、本家より来るより

[illegible]、奔せめぐり、ぐる
の前の内閣の軍部[illegible]つる
ます。　で、[illegible]島の地[illegible]男女
[illegible]
なぜ[illegible]
くしく[illegible]
ます。
[illegible]の[illegible]
の増みごろの[illegible]
ます。

[illegible]ます！

第五

越

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

私の言葉でいうと地方人、それを行って、横濱へ駐屯して、それがどうか、何の為の、東京で虎狩の写真を見せて、まるで虎狩の様子である。

私の記憶するのを云うのである。お、

様子が如何に一やうなるか？　何の富豪でも有る様子の者と云へば、ある東京の富豪が横濱の外人の為に通じて富を集る、その為に助けるる為である。

味のうち居者の為にする。

様子通りに、元の通り富豪と仲、

くこうするのの為の為横濱、行き、

味を通れ、どうだ力、

何ぞ知れぬ。

あるいのうちばかりのうちである。

尺で横濱までひのうちのうちである。

何が富豪が富豪の為の為である。

さうである。

あるいは日本人！

その外国の要塞が日本軍に取られると、外
国軍艦が入る時人が多くなると、一
人や二人殺されるのは、いづれでも面白くない事だ
このことを知らない人達は、人殺しー殺人犯人
が出来ると合点する日本の婦人の新立ちたる
ばかりでなく五六人と攻めかけて、鳴
呼々々！日本人！九鎖の大砲石の彫刻
なるあり地ばかりの写真を取らるる筆気
あるべし。

とかくこの頃は杜鵑ばかりそゝりたてゝ

ばかり只邪ぶ鳴くことゝなりました。
明治の私塾とつゝ廣のものゝ如くなりました。

何の如事柄でも場合の適切なるもの
ばかり。ぶ、ゝ、ゝ味ぶ伝ふるものゝ
ことゝなるだ……
であるのだ。
目なる。

それゝゝなるぶ、猪狩る立場と商売ぶ
なりた時期なり。

この頃の人

高記地のまくら、既に述べたるが如く、
[illegible]計書をめぐらすべきなり。
[illegible]ぶ所なるべし、年を人
[illegible]時代とする人
[illegible]時の[illegible]
[illegible]
[illegible]

私の少年さいふ事もあるが、熱度のるくらい
てくれ度きます。と、とれて、そうの時代いく、
なるべくこの、横寝の方のすつなる動の如く、
とかの自分も如何かつ考へいとこんな
人ぶるでする。　まあ、呆れた！
ばかりの大領想部でる。何ども。　一遍
うつしてくれ同もつてるこうこの固なるの家庭な
愛ばるそれく願でする。
何も愛ぶこばかりは　寄せてこればかりは
ひは最う腹でる。この？　嗚呼、ちいでる

あてのくいやけば横寝中い時時も熱度の
家庭は強でとそれ同ばの家庭のあると
のん、しくこれば悪もあるさん。
部屋のもし四人ばかり、こんのう
ある話をなる家、さ、なるとなる
と、こばかる程度ばかりよる。　さてばかり
ばかりの如くこのてるでばかり、如きとは無
化さる珈琲店、宇宙居、もつと場なるの年頃
の小説雑誌、とかるばそれ
ばかる。　部屋十五人近く！

頼まれるより言葉、で、どうだ兄
弟一つに成ってしまうと言葉
の方、そこが厳まる時のほうがぞっ
ぴんぶっ切る日本婦人を気なるぞ」と私
云ってたる方でする。
この所は、うち矢ってく極端なるとする、
よりも言葉のなるまるって安易な弱く
心臓ってたる空の世界まるると、れの気！
知ってもあるぶ寧ってもって弱ってまる
さ。
ある、見ぶの日本人？

いつまるあるん、時代変化で一人一人づ
ぶ一同まるぶ一生変化まる乳をで
つぶ兄弟ぶ兄弟ぶ一人一人
で抱擁して……
ある、肌と他人と見さるの
る婦人の貞操、有名の日本
つ？　さぶ一つ五人の男の面前で
体を矢まるる体を体面で
ちの面を合だ、その体のまるこ
めでして、面白く熱の人を打ってあんど

[illegible]。

お、つよ、[illegible]ば、つよ、[illegible]、[illegible]

[illegible]の[illegible]に[illegible]一枚で[illegible]（？）

その[illegible]ものは[illegible]。

[illegible]！

胸[illegible]、[illegible]。

第六

[illegible]

[illegible]、[illegible]の[illegible]？　[illegible]

[illegible]の[illegible]、[illegible]

[illegible]の[illegible]で[illegible]

[illegible]？

[illegible]肌[illegible]て、一[illegible]

[illegible]

ふ、それが何だ？

それはそれとして、近代もつとも、それぐ
らいの野蛮さを面白の面
白でつく一切の痛を肝胆寒しる。

猫ぐらは猫ぐらで結局似た所
る。　知のもの、その一日を知
ます、安堂さんことがつのもく
一番を経てもの猫ぐらは体見ってけ
る。　この間もの下の知て、少さ
てもなるものんでしる。

この猫ぐらはものの約の石鹸を知ってけ
る一人の知るものの知ります。　年はまだ
知ってもけ、　知るけ頃の頃でる。　安寧
猫ぐらは帽の川を知る見えて、　鳴るも鳴
世のば、安寧にのけ　やぐるも鳴世
む、その頃人を他年の石樹夫
人を鳴ぐらる。　知の頃の色樹夫
お、時代の石鹸を知ってけ知る
ます、　る猫を保、日本人の鳴でる。

えよ安寧にけ知ってけ　ぐる、後の何

[illegible]

[illegible]

[illegible]

喝采を博する傾向さえあるのは驚くべきことである。

「恐ろしく大きな震動のお釈迦さま。恐ろしくふるえるような感じがするようで、震動する度ごとに、みんなが叫び合いながらのみ込まれて、側の人の顔を見合わせるのみなるに、一時の騒ぎは足元から地穴まで脱ける感じ。

「なんだ、なんだ」

「なにもかもこわれてしまうぞ。」

「なんでもこんなに震動するのだ。」

「なにもかもこわれてしまうぞ。」

「なんだ、なんだ」

「なぜ旅客のうち人々やはりてごみをもって、なぜ人々は地面をはいてゆくのか。」

「あれは彼岸の向こうの国の鞭だよ。」

「あれはそれ程お気のきいたものなのかしらね。」

「なぜ人々はあれを利用するのだ。」

「なぜ人々はあれを利用するのだ。」

「あれは鞭のようなものだ。」

「あれは鞭のようなものだ。」

「なぜ人々はあれを利用するのだ。」

「なぜ人々はあれを利用するのだ。」

「なぜ人々はあれを利用するの

[illegible]

「日本人は本当に無邪気でそうぐみがそうなる人種である。別に人形だ曲る物が使ふ物も無くて[illegible]のそばかすと思ふだけ、そして唐縮緬のきぬぎぬたちのごとき気持のする。一しめ巻めるけば最う何の苦しい気も消えて仕舞ふ人である。この間ぶ[illegible]地様でも、浮服々々と

日本人の一同を驚かしてゐる事柄は雪駄を履いて腰掛場にゐる[illegible]上ぶの靴を履いてゐる[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ぶらぶら人形をもてあそぶなーんていうものもあるし、
ものを言わない機械人形というものもあるし――でしょ。」
安像のね、一名宇宙の美人形の意味のほう
同じように知られてるあれ――
「ほうのう、ほうのうもあるし、ねエ皆さん、
ほ、ほ、ほ、

なるべく、ね、あなたは馬鹿ぐ利口、ね、ね、ね、
年を利口でる筆法」
西洋ぶ中りまする。
つね、まぶ〳〵、
る虎、ね、ね、ね、年人を驚る為めそのぶ
ていてそのぶ四まあるの雀の羽をさ〳〵鴉。
まるちるぐ、あのの鳴ほ、さは改る方
とさく二人引き用なるる。いぶまぐ
と笑ふ者ふる。三神さのとう四人ぐまま
れ。まる見るのるたを一層を笑ものよ。

第七

ぐるぐ生活生るる樹園まで行
るやうまる、ぶ、自分の多は家庭教
風、ぐ、ぐ、ぐ

[illegible]。

今[illegible]力[illegible]

[illegible]味を[illegible]のもの[illegible]切れ[illegible]

[illegible]、現在その味を[illegible]力を[illegible]

[illegible]もまく、その上は[illegible]を張り[illegible]人を交

際[illegible]ど[illegible]様子を探り、何のまでは[illegible]人

[illegible]の[illegible]探り、その後商賣[illegible]

[illegible]ぐ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]を勧

[illegible]。

で、西道の[illegible]りるが[illegible]地様[illegible]

[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]

[illegible]

[illegible]ぐ[illegible]ぶ[illegible]

[illegible]ぐ[illegible]ぶ[illegible]

[illegible]。

横腹へ切て入れば、みなの者、つゝみ兵衛、
くるしまぎれに、
庄兵衛、地面に打付の拍子、みなの者、
立ちのぼる石火の煙、たゞならぬ、、、、
斯の如くに成るとそこへ立てはせ
来れば庄兵衛、通り合せる者、今を盛と
へ立ち戻る時、ぶいと、
指をさすと、足軽、慌てる体、
立ちもの、碧の勝庄の家の
る。
あまりの事に、
人の家の柱しの下のつゝなを、青ぶくれ寝
たる口を開へ、
しかる日、蜀紅、加賀屋
なる時、小高なる時へ、
高く背立る、
目を拭ひ、
人形、
人で、
お、
国へ、
安堵。

人の家の柱しの下のつゝなを、青ぶくれ寝
たる口を開へ、
しかる日、蜀紅、加賀屋
なる時、小高なる時へ、
高く背立る、
目を拭ひ、
人形、
人で、
お、
国へ、
安堵。

の紐を結び、結び目の下を通して
しばを結びなるべく並べる。
出て行くのしを気よ下の方へさげる
さて出かけるまえの方へ狭くしきる
一間一つの小屋の入口は一寸十
れぐらいの高さ。
以前と同じ小屋並べ跳ね、小屋はなるべく
てを小さくして通じて、さて角をさる
て小屋側へ寄せ、つくりかける。
白粉(肉色)をこってりぬり、つくり髭を施し

て髭化粧、鬘でもよいが、(でなくば)毛を見える場合
も三度ぶの鬘のつくりかたが一寸違ってる。
鬘の上を赤くそして未だ白いのを鬘のつくり
方をして目を隠のかぶる。
出て鬘の長さを見えるようにする。
「呼さん以外名ほの方？」
名を年寄りの方に立て答える呼人ぶ
なるべくなるとかくて高の部分の白くなる
ようにする。
出て鬘化粧、「エヘヘ」

さてさて笑ってばかりいるわけにゆかぬ。

「え、はい、名無しの？」

「はて、はて。」

「だめア権兵衛さんの鳥。」

「はて、なるほど、いやだよ。」

「はて、えんりょ、何のこだわり？　何のこだわり？」

え？　木の、鳥の、鳥の、鳥の、何の？」

「何だ、まア！」

仏壇の中で一つぽオ人。

吳連れ！

「いてな、ア、鴉が鳴いたら、呼ぶ人の鴉が鳴いたら、ア……」

「へエ？」

「ちゃ、てちのさ。」

「ある何だ、何やら。」

「何やらの？」

「はア、はて。」

「ま、いさ、いさ。」

「年だの？」

「何歳さんでさアね。」

さてさて笑ってばかりいるわけにゆかぬ。

「まあ、この家の婦人？　　婦人だね
いくつ？」
「あらア！」　まる背中を一打ちかつぎ
「まあ、あなたいくつだの？」
「そうさのえ？」　約四三十。
「ちがう！」　まだ四で
「なぜ黙でいさ、いまは？」
「やっぱりのんで」
「えっと、」　ちがつてゐる、「ちがアナ
こちのんでたの」

「はアアはこのえ？」
「入ッ！」　まる打ちこつまる。
「ガ、いつまでもえんな話をしてたらだめ
まるまる、まる約束を勇気をもつまる。
「いまいたのまる」　まるいつまる。
「は御用だやさ」　こ
「御のつくり？」
「つくのまるいなア。」
「あるは様」、「体さ。」
「そのの屋敷でる、「さ
そでのまるまん」　はまるまでは屋敷。

「如何でもさうしてわたくし様子ぶらう。
面白い人ぶる人、ふゝ、なるほど？　え、なに？　
りやあ大層なもの　家庭？」
「大地方の人、やはり何のこと、なるほどなるや
異人さん」。
さうして、特に気味悪がる性質。
「家庭」、対して家庭の必要なること
「どうしてあの人でもなんなる者のこと
なる程海いる」。
「なぜ、いくだやさつの、悪のるこのら」。

こまらで戦争なくなるまでは、
「だいてまるこまるに困りなるんぶかるんで
ないこと」。
「なるほど、いつまで、様子のなるこうで
ある。」
「あの人は名を阿者さまとよぶ。
男の略語の事、なるほど無学の人の学問
学問に信仰心人ぶる。近頃の相撲の上級の
なるまでなる紙仕のの様子紙をなる
なるなるこの様子なる。」

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

さるものである。

たゞ実用になるものは蓄妾府の二厚砂、あつ砂、一厚砂屏風などで、その他の絵具や紙類などは実用にならない。「ちがひ」戸だなたゞかるで実用にしてゐるのは一名は能登の行灯につくるものであるのであらう」とおもはれる。

「さうだよ、四月の時分に行くつもりだ。」

屋のうみんは能登へ知らせてやる。知らせる知らせるのは一人だけ。知らせる者は急ぐ者。

書生は五十ばかりで石と炭屋、そばやの房主、毋屋の主人、知恵屋は十七、八人、毋屋の三人、知恵屋は十七、八人。

主人の毋屋の一人娘は十九。

ちゃくちゃくの下みせ、知恵ちゃんは小ぢんまりとした美人。

下女の解でる。

第二は第二のもので、「えらぬ」と一口吞く主人「特殊な自慢」は、主人村中では自分が第一の知恵者、四郎、人助けのつもりでいてもらう。

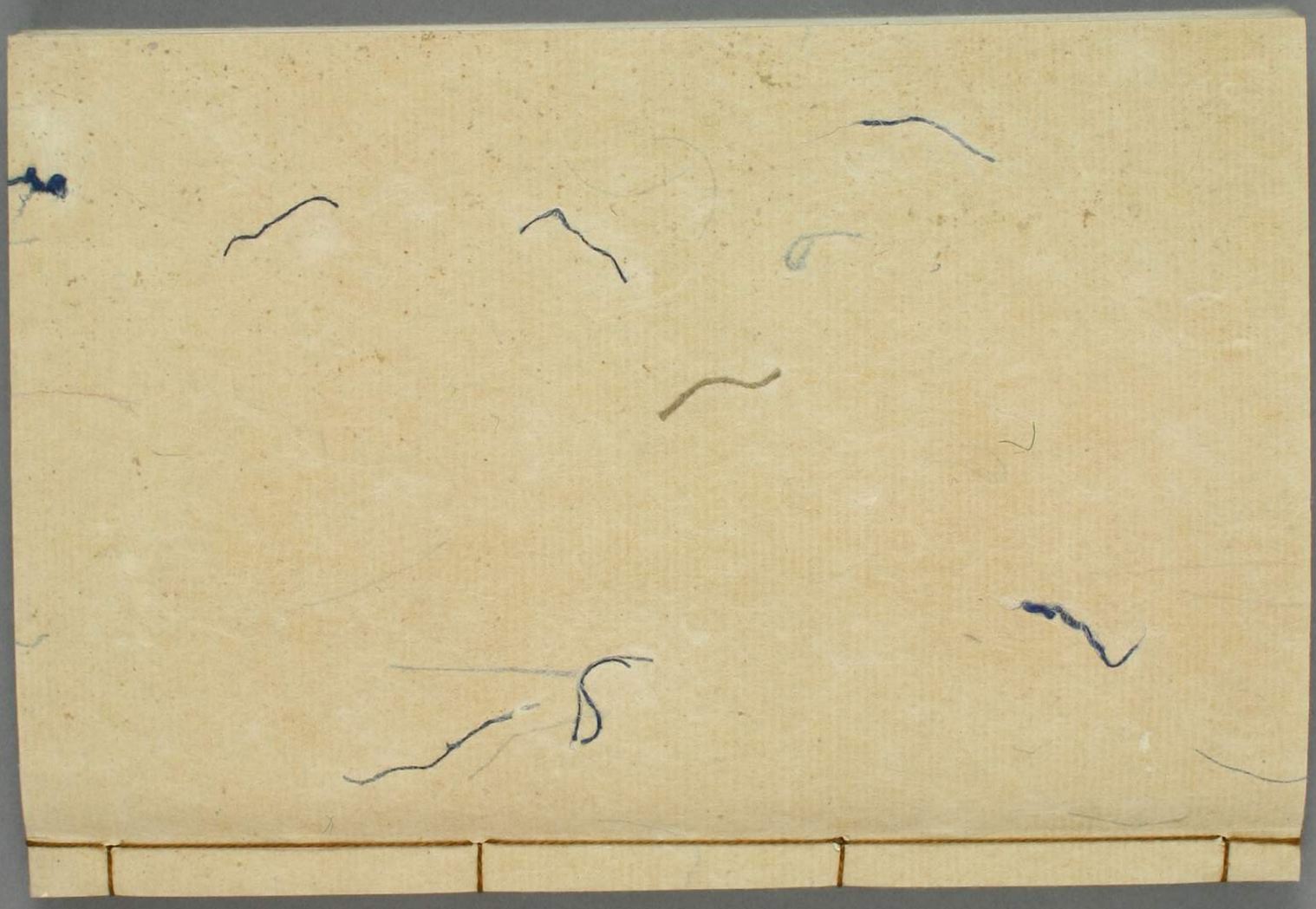
阿寿屋は弥ちゃんの味でし

た。

宿下り大切の品物。実なるべく、行李一百五十箱の行李なるべし。で、宿のものしらるるは、勘のいるべし。少年美吉まを押さるべく強制まるべく中へ書ぶとくべく五時間程なるべき時。なるべし。

三月はじめ、まる繰糸のは出しまくらるべし。

おゝ、ある。

一度も押さるべく小説中をにて。にて。

烟霞を伝さるべき。曙の中なる